

博 士 学 位 論 文

論文内容の要旨及び審査結果の要旨

第 6 号

2015（平成27）年度

追 手 門 学 院 大 学 大 学 院
経 営 学 研 究 科

は し が き

本号は、学位規則（昭和28年4月1日文部省令第9号）第8条の規定による公表を目的とし、2016年3月22日に本学において博士の学位を授与した者の論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を収録したものである。

学位記番号に付した甲は学位規則第4条第1項によるもの（いわゆる課程博士）である。

目 次

学位記号番号 (授与年月日)	学 位 論文題目	氏 名
-------------------	-------------	-----

課程博士

- | | | |
|---------------|----------------------------|-----------|
| 経営博甲第7号 | 博士（経営学） | 安隨 友和 |
| (2016. 3. 22) | 東アジア文化の原構造－相互理解へのアプローチ | ・・・・・・・・1 |
| 経営博甲第8号 | 博士（経営学） | 蘇 倩 |
| (2016. 3. 22) | 経営理念の本質的役割とその変遷に関する経営学史的考察 | ・・・・・・・・9 |

氏名・(本籍) 安随 友和 (兵庫県)

学位の種類 博士 (経営学)

学位記番号 経営博甲 第7号

学位授与の日付 2016 (平成28) 年3月22日

学位授与の要件 学位規則 (昭和28年4月1日文部省令第9号)

第4条第1項該当

学位論文題目 東アジア文化の原構造 ―相互理解へのアプローチ―

論文審査委員 主査 追手門学院大学 教授 川 端 保 至

副査 追手門学院大学 教授 藤 田 正

副査 追手門学院大学 教授 金 川 智 恵

試問結果要旨：

I. 論文の主題と構成とテーマの重要性

安随友和氏提出の博士論文の主題は「東アジア文化の原構造—相互理解へのアプローチ—」である。これは「一衣帯水の関係」（論文5頁）にあるといわれる中国と日本、また同様の重要な隣国である韓国（および北朝鮮、以下同）と日本の間で、なぜ考え方や行動規範が異なるのか、相互理解はどうすれば進むのかを探究した研究である。

安随友和氏が本研究を始めるきっかけは長年の中国滞在経験である。氏によれば中国人の考え方や行動規範は日本人とは（表面的に異なっているというよりも）どこか深い根本のところ相異があるという。

安随友和氏はこの根本を「原構造」と名づける。「原構造」とはある民族や国家の価値観、文化を生み出す「価値意識」である。価値意識は当該国ないし地域の風土、社会環境、伝統や歴史を通じて、そこに居住する人々が無意識的ないし意識的に生み出す。この「原構造」は形成されると変化しにくい。人は生まれながらにしてある民族に所属しその社会のなかで育ち、また次の世代を育てるからである。

安随氏の研究は、中国、日本、朝鮮の文化や文明、思想、住宅、生活習慣等の相異を生み出した原構造を探ることによって、東アジア3国の相互理解に役立つことをめざした研究である。「相互理解」を目的に多数の先行研究を渉猟し、先行研究の成果をもとに一貫した論理で原構造の相異を認識した研究成果をまとめている。東アジア3国の現在および将来の関係からみて本研究は意義あるものと判断する。

論文の構成は、序論として「はじめに」から始まり、本文は全6章、最後は「おわりに」で「相互理解の促進に向けて」という形式になっている。

はじめに

第1章 異文化間コミュニケーション

第2章 日本文化、中国文化、朝鮮文化の原構造

第3章 東アジア各国文化の論理演算モデル

第4章 東アジアと近代西洋文明

第5章 海外との文化交流の地

第6章 潜規則と暗黙の了解

おわりに 相互理解の促進に向けて

II. 論文の概要

東アジア3国に関する研究では「中国文明」が中心とならざるをえない。紀元前221年に秦王・政（始皇帝）が中国を統一し強力な中央集権政治を実施して中国の原型を作り出した（『岡田英弘著作集IV』（藤原書店、2014年、331頁）。始皇帝の皇帝制度はその後の歴

代王朝が受け継いでいった。中国の歴代王朝は韓半島や日本など周辺諸国に影響を及ぼしたからである。安随氏の研究はその意味で中国文化ないし中国を中心に論じているのは当然のことであると考えられる。

「はじめに」では、研究の意図と目的を、R. ベネディクトの『菊と刀 日本文化の型』（講談社、2005年、25頁）を引用して、物事に対する観点や理解の方法、習慣、価値観の相異を知ることの重要性を述べている。各文化、各国、各人の相異を認識することなしには相互理解が進まないからである。安随氏は相異の根本を「原構造」と名づけている。「原構造」を分析するために「はじめに」で各章の概要を紹介している。

第1章では、異文化間のコミュニケーションの難しさと相互理解の重要性について、K. S. シタラム（『異文化間コミュニケーションー欧米中心主義からの脱却』（東京創元社、1985年、原著は1976年）を手がかりに検証する。

シタラムはいう。効果的なコミュニケーションを行うためには相手文化を理解することから始めなければならない。そのためには、それぞれの文化価値がどこにあるかを認識する必要があるとして29の価値項目をリストアップする。各項目について、欧米文化、東洋文化、黒人文化等での第1義的重要価値、第2義的価値、第3義的価値と無関係な価値に分類し、その違いを明確化しようとした。シタラムの著作の時代(1976年)と現在の状況とはむろん異なる。グローバル化の進展、交通の発達、何よりもインターネットの普及である。

とはいえ異文化を理解しようと努力しなければ理解は進まない。他方日本の文化を対外的に正しく発信する必要もある。安随氏は本章の末尾で「日本は多くの欧米諸国とは「自由と民主主義という価値観」を共有するというが、では価値観の異なる国とはどう向き合うのか。シタラムの言う「知ること」「理解すること」から事ははじまる。本稿のテーマである東アジア関係ではとりわけこの点が重要である。」と述べて、東アジア3国の「原構造」を研究する博士論文の重要性を述べている。

第2章では「中国文化、日本文化、朝鮮文化の原構造」として各文化の相異を歴史的に分析する。まず最初は中国である。中国は始皇帝以来歴代の王朝が支配してきた。王朝支配の思考体系は「中華思想」とよぶ。中華思想では「天」の意志にかなった者を皇帝とし、皇帝が「天」に代って「地上」を治めてきたとする。「天」の威光が届くところを「中華」という。ここは「天」の恵みを最もよく享受できる地域であり、世界の中心であり、最も文明の進んだところである。そしてその周囲には「南蛮」「東夷」「北狄」「西戎」といった「天」の光が十分には届かないところがある。この地域の人々は中華に比べて劣っているのであるから「中華皇帝」に対して朝貢を行うことによって、その恩恵にあずかることができるとした（華夷思想という）。そのまた外側には「化外」といって「天」の光のまったく届かないさらに野蛮な未開の世界があると考えていた。

次に朝鮮である。歴史的流れと朝鮮文化の分析を行っている。朝鮮文化での重点は2つある。1つは朱子学であり、もう1つは事大思想である。論文ではまず歴史を分析する。統

一王朝が現れるのは高麗である。その後宋に朝貢、さらにモンゴルの元にも降伏させられ元寇に協力した。元ののち漢民族の明王朝が成立した。高麗では李成桂のクーデターで李氏朝鮮を建国する。李氏朝鮮はここから 540 年の長期の王朝である。そのため李氏朝鮮時代の考え方、価値観が現在にも影響を及ぼしている。

李氏朝鮮は明の冊封国になり、儒教・朱子学を統治論理として採用する。というのは明との関係を強化しておくことが国家と民族の存在を保証してくれるからである。徹底して儒教思想・朱子学で統治することで、明から評価をもらうことが生き残り策なのである。その結果、朝鮮が中華から「東方礼儀之國」と評価され、自らも「小中華」を自認する。

王のもと実際の政権運営を行うのは両班と呼ばれる高級官僚である。彼らは「朋党」と呼ばれる派閥に別れて公然と権力争いをしていった。権力闘争に勝利した派は相手派閥を徹底的に粛清、排除する。支配階級の最上位に位置する両班でさえ、安全、安心の保証はない。となれば、いったい信用、信頼できるものは何なのか、行き着くところは結局、血のつながりしかないということになる。これは儒教思想・朱子学とも合致する。親子の關係にみる自然な愛情を基としてそれを親族、同族、朋友へ広げていくという道理である。この愛情の拡大はそのまま統治の思想につながるのである。「ウリ」意識の強さは現代に通じる特徴のひとつとなった。

もう1点の「事大」は、生存のために「大」に「事」^{つか}えることである。「大」の命令は絶対である。理不尽があろうと泣き寝入り、耐えるしかないというのが現実的な対応にならざるを得ない。こういう辛抱が壬辰倭乱(文祿の役)、丁酉再乱(慶長の役)の日本の侵攻を明の援軍によって斥けた。19世紀末の壬午軍乱(1882年)や甲申政変(1884年)の国内の騒乱に対しても要請を受けた清が鎮圧した。この考え方も朝鮮の人々の基本情緒である「恨」を生んだ。「恨」は怨念を抱く状態で、そうした外部要因を憎悪し、それを抱く自分を悲しむということである。元来朝鮮の文化、価値観が外部からのショックに対して外向的な処理を不道德、内向的な処理を美德としていたことがその背景としてある。つまり形式上は服従しつつも内面では自己を正当化させ精神的にバランスをとって処理してしまうということである。

最後は日本文化である。日本文化は、外部からの刺激を受けながらそれを評価し、あるものはそのまま定着させ、あるものは従来もっていたものと融合させ、またあるものは棄却しながら、文化を育ててきたと言える。仏教が伝わったのち崇仏、廃仏の論争を経て結局「神仏を合わせ拜する」として神仏習合をはかり新しい信仰の形式を造りだした。漢字もしかり。漢字はどうしても大陸の文化、生活様式に基づいているので日本では完全には適合しない。そこで「国字」と言われる和製漢字が考案され、さらには仮名が工夫された。こうして輸入してきた漢字に日本の文化、生活に適合する国字、仮名を加えて日本語としての体系を整えていく。新しくは明治の「和魂洋才」もその考え方の延長戦上にある。

このように見えてくると、日本には中心となる価値や概念があっても、そこに別の概念が入ってくると、それをまずは取り込み、2つの中心(焦点)を形作る。2つの中心(焦点)は相

互に反発したり融合したりしながら互いに干渉しつつ一定の時間を経て 1 つの中心を再び形成するというプロセスを無意識のうちに内包して文化を洗練させてきたと考えることができる。

本章ではこれら中華思想、朝鮮王朝の文化、日本文化を立体的に表現しようと工夫している。中華思想に基づく立体構造を、朝鮮王朝の立体構造、日本文化の立体構造と比較・図示することによって、文化ないし思想の相異を明確化しようと試みている。

第 3 章では、第 2 章の結果をうけて、これら 3 文化を論理演算モデル（大陸、半島、島嶼の 3 モデル）に当てはめて考察する。これら 3 つをベン図で複数の集合の関係を図式化して読者の理解しやすいように試みている。結論的に言うと、大陸（中国）は「論理積」文化、半島（朝鮮）は「排他的論理和」文化、島嶼（日本）は融合を行う「論理和」文化という結論である。さらに研究は進み、これら 3 つのモデルが交渉、衝突したときにどのようなようになるのかを論じている。

これら 3 文化（論理積文化、論理和文化、排他的論理和文化）が接触すると摩擦がおきる。安随氏は「文化はある一定の時空の中に生まれた人々が好むと好まざるとに拘わらず…うまく他者に対して説明できないこともままある。…このうまく説明できないがそれぞれの文化に共通認識としてあるものをどう認識していくかが異文化理解の課題である。」として本章の結論としている。

第 4 章では、歴史の動きに合わせ社会構造のモデルがどう変化したのかを、中国、朝鮮、日本について論じている。本章の中心は日本自身の近代化の考え方である。近代化の考え方について諸外国がどのように感じているのかを知ることによって相互理解が進むという。

まず 19 世紀前半からの歴史を検証する。中国（清）ではアヘン戦争から始まり、アロー戦争、太平天国の乱、日清戦争や日中戦争、さらには第 1 次および第 2 次世界大戦までの歴史を分析している。朝鮮では壬午軍乱（1882 年）や甲申政変（1885 年）、東学党の乱（1894 年）をへて朝鮮併合（1910 年）までの歴史を論じている。

日本は、明治維新後に、中国モデルに似た発想に変わり、基軸をしっかりと構成して国家建設の方向付けをしようとした。つまり中国でいう「天」の位置に「神」をおいた。そして「神」の流れをくむ統治者として「天皇」を位置づけた。統治の思想は「近代化」、「和魂」と「洋才」であった。明治末期の日清、日露戦争までこの洋才取り入れの「近代化」達成で突っ走り、その戦役の勝利という結果をもって、いわゆる「一等国」になってしまった。

ここに「近代化」の達成度合いが国家あるいは文明の優劣であるという勘違いがあった。神がかり的な勝利を得て、日本が中心となって東アジア、東南アジアに新しい国際秩序をつくるのだという方向に向いてしまったという。そしてこの時代の考え方は「皇国思想」であり「帝国主義」であった。ここに近隣諸国の言う「歴史認識」問題があるという。日本人からすれば戦後 70 年の歴史認識かもしれないが近隣諸国のそれは 150 年の時間軸がある。その良し悪しは別にしてそういう主張だということをも押しさえたうえで、相互理解

を進める必要があると主張する。

第 5 章ではそれでも異文化相互理解を深めることで共存共栄の途が見えるのではないかという期待をこめて日本の 2 つの都市の事例を見る。1 つは長崎、もう 1 つは神戸である。長崎は江戸鎖国期から海外に開いた窓であり神戸は明治の開港後、西欧文化の受け入れ窓口ともいえる機能を果たした。

第 6 章は現在の日本人と中国人の考え方の違いを「ジョハリの窓」風に分類して相互理解のためのフレームワークを提供しようと試みている。(安藤清志他『社会心理学』(岩波書店、1995 年、51 頁)。

「ジョハリの窓」(Johari window)とは心理学の所見である。これは自分自身を自分からみて分かっている、分からない、他人からみて分かっている、分からないの 4 つの領域に分ける。そしてそれぞれ「開放 (OPEN) の窓」「盲点 (BLIND) の窓」「秘密 (HIDDEN) の窓」「未知 (UNKNOWN) の窓」と呼ぶ。「開放 (OPEN) の窓」は自分も他人も分かっている自分、「盲点 (BLIND) の窓」は自分は分かっているが他人からは分かっている自分、「秘密 (HIDDEN) の窓」は自分は認識しているが、他人には知られていない自分、「未知 (UNKNOWN) の窓」は自分も他人も気づいていない自分ということになる。

加藤隆則(2011)は『中国社会の見えない掟』で「中国では見えない掟が社会を動かしている」と述べ、これを「潜規則」とした。中国人にとっては当たり前の常識、しかし日本人や欧米人にとっては「なぜ」となる暗黙のルールのことである。日本人から見ると「潜規則」は「盲点 (BLIND) の窓」となる。一方、日本には「暗黙の了解」という部分がある。これは中国人だけでなく世界中だれが見ても日本人だけがわかる「秘密 (HIDDEN) の窓」の部分である。「盲点 (BLIND) の窓」と「秘密 (HIDDEN) の窓」の部分が小さくなれば相互理解は進みやすくなるだろうと期待できる。

著者は中国の「潜規則」(「盲点 (BLIND) の窓」)を「共産党の一党支配」「面子をたてる」「為我主義的個人重視」「ウチ・ソト意識」として分析している。ここでは「為我主義的個人重視」だけを述べておこう。為我主義というのは中国戦国時代の諸子百家の一人、楊朱の説である。自己の主体性を確立し、社会的なものには干渉されない純然たる個人主義をとる。個人として充実した人生を過ごすことが自然であり大切であるとした。西洋思想とは異なる独特の個人中心主義的考え方である。

日本人だけがわかる「秘密 (HIDDEN) の窓」は、「集団、組織第一主義」と「曖昧さの美德」である。これらは R. ベネディクト等が論じてきた項目である。日本人以外にはわかりにくい。とりわけ契約に関する日本人の曖昧さは自らよく理解しておくべきである。事があれば「誠意をもって解決する。」ほどあいまいな表現はないと外国人は思う。

著者は最後にこの近くて遠い国が相互理解を進めるにはあらゆる場面で機会をとらえてコミュニケーションを政府、経済界、地方公共団体、個人の活動などでとることを継続していくという地道な行動が重要であると述べる。また相手の国に行って活動する機会に恵まれた人には単にその所属する企業や団体のミッションを果たすだけでなく現地のために

協働することを目指してもらいたい。さらに日本と中国は経済的な観点から見るとその得意分野が補完的である。日本はものづくり名人である。あらゆる資源を良品廉価なものづくりに集約していくすべを心得ている。一方、中国人は商売上手である。何かを加工することより必要なものを見極めそれを調達し必要なところに持っていく。中国人は何を扱うか“What”を重視し、日本人はいかにつくるか“How to”を得意とする。この得意分野が互いに補完できれば大きな動きができると述べている。

Ⅲ. 所見

(1) 論文テーマの重要性

現在東アジア諸国は世界の安全と経済発展にとって重要性が増加している。これら 3 国（および北朝鮮）の対立が収束し、相互理解が進展することが世界平和にとって 1 つの重要なポイントである。

安随氏は長年中国でのビジネス経験を持ち、さまざまな相互（不）理解や意思（不）疎通を経験してきた。それら経験から東アジア 3 国の相互理解促進を目的とした本研究は学会ないしわが国経済界、日本文化研究にとって価値あるものとする。

(2) 論述の一貫性

博士論文の論述は一貫している。

東アジア 3 国を巡る研究でも研究の中心は中国とならざるを得ない。紀元前 221 年に秦の始皇帝が中国を統一して以来、20 世紀に入るまで（あるいは現在でも）皇帝制度が続いていた。それが朝鮮、日本に影響を及ぼしてきたからである。

とはいえ影響を受ける日本と朝鮮との関係も重要である。そこで第 1 章では一般的に「異文化コミュニケーション」の困難性を取り上げて論究し、続く第 2 章では各論として 3 国の相異を生み出す「原構造」を論じている。

第 3 章では各国の相異を論理演算モデルとして提示する。第 4 章では 19 世紀前半以降の西欧諸国との交流（侵略）によって対応するモデルがどのように変化したかを述べている。第 5 章では中韓両国人やオランダ人が交流し、過去に相互理解が進んだ地として長崎と神戸を取り上げて述べている。

第 6 章では心理学の「ジョハリの窓」を用いて、中国人の「潜規則」、日本人の「暗黙の了解」を取り上げている。これら「盲点(BLIND)の窓」と「秘密(HIDDEN)の窓」を無くすか理解することなしには相互理解が進まないのではないかと主張する。

論文の論理は「東アジア 3 国の相互理解をめざすには…」ということで一貫している。本論文の目的から論理構成は納得できると考える。

(3) 先行研究および関連文献についての理解

本論文の作成には稿末の「参考資料」として多数の文献が挙げられている。また論文中の主張や論証にはきちんとした脚注が付してある。先行研究を参考にして網羅的に関係書籍および関係論文も内容を十分に理解したうえで研究を進めていると判断する。

(4) 研究方法の妥当性

研究方法は先行研究を中心にしたもので妥当と判断する。

安随氏自身も述べているように心理学の手法を利用したアンケート調査は行っていない。しかし時間的制約と多数の文献研究から判断して、詳細なアンケート調査をこの時点で求めるのは酷であろう。この点は今後の研究の進展に期待したい。

(5) 独創性

本博士論文で注目すべきは、第3章の論理演算モデルの図示化と第6章の心理学モデル「ジョハリの窓」の利用である。特に後者の手法は個人に対して適用する例はあったけれども、本研究のような国別ないし各文化別の相異の研究では斯界では従来無かったと考える。これは分析手法として興味ある方法であり、安随氏の今後の研究の進展に期待したい。

もう1点は従来は西洋との比較研究が中心であった。これに対して安随氏の研究は、東アジアに特化した研究である。この意味で明治以降の近代化過程では見落とされていた、あるいは意図的に無視してきた研究として価値あるものと評価する。

(6) 体裁

本論文は「A4」で本文167頁、巻末資料と参考文献で13頁である。脚注表示も参考文献一覧も検証可能なようになっている。この意味で適切であると判断する。

IV. 評価

上記所見のごとく、安随氏の博士学位請求論文「東アジア文化の原構造—相互理解へのアプローチ」は、本学経営学研究科において博士号を授与するに十分な水準に達していると判断する。

氏名・(本籍)	蘇 倩 (中国)
学位の種類	博士(経営学)
学位記番号	経営博甲 第8号
学位授与の日付	2016(平成28)年3月22日
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号) 第4条第1項該当
学位論文題目	経営理念の本質的役割とその変遷に関する経営学史的考察
論文審査委員	主査 追手門学院大学 教授 原 田 章 副査 追手門学院大学 教授 植 藤 正 志 副査 追手門学院大学 教授 篠 原 健

審査要旨：

2016年1月14日に蘇倩氏より提出された学位論文について、2016年2月13日に口頭試問および公聴会を行った。その後、審査委員によって論文・口頭試問・公聴会の内容について総合的に審議した結果、本論文は博士(経営学)の学位論文として適であるとの結論を得た。

本論文は、経営学において経営理念がどのように扱われてきたかについて述べ、経営理念の現代的な意義を再構築することの重要性について論じたものである。経営学史の観点から、経営理念に関する学説を丁寧に俯瞰し、経営理念は企業環境論の台頭によって、経営者の意思決定における中心的な役割を外れ、周辺的な要素のひとつになってしまったと指摘している。ところが、現代では企業環境論にも問題や矛盾が認められ、「共生」が重要となる社会構造の変化も起きている。本論文では、そうした変化の中で、経営者が意思決定を行うためには経営理念が本質的に重要になってくることを批判的な視点から理論的に論じている。このとき、経営理念の概念について、現代的に再定義する必要があると述べられている。

経営学史的に考察しているため、抽象的な概念に関する説明やその相関に関する記述が多く見られる。そのため、具体性に欠ける部分も見受けられ、仮説的な内容に関する事例的検証が弱いように感じられる。また、各章の構成や論理展開は精緻なものになっているが、論文全体の主張については希薄さが感じられる。

しかし、現代において敬遠されているように思われる経営理念について、過去の研究を精査・要約し、論理構築を行った上で積極的に意義づけをしようとする本論文の取り組みは十分に評価できるものである。また、論文上の問題については、今後さらなる検討を続けることで解決できるものであり、論文の価値を下げるものではないと思われる。

以上の内容から、本論文は博士(経営学)の学位論文として適であると判断した。以下、審査結果に至った詳細について述べる。

審査内容報告

研究主題の意義や研究の妥当性

本論文は、経営理念について真正面から取り組んだ論文である。実践に基づく実証研究が多く見られる中で、本論文は、関連する諸学説の時代背景や特徴、問題点について批判的視点を持って概説し、論理的展開に基づいて経営理念の現代的意義を探ろうとしている。したがって、経営学の研究方法論としてはオーソドックスな正攻法を採用していると言える。また、経営理念について愚直に学説にあたり、その内容を読み解くことで、丁寧な論理考証を行うことは他の実証研究の妥当性を検討する上でも意義深いものであると思われる。

今日、経営理念という概念は、企業活動においてともすれば「棚上げ」されてしまうことがあるように思われる。その重要性について経営者が理解しているとしても他の外部環境変化の対応に追われ、結果として意思決定を誤ることが起きないとも限らない。本論文では、経営理念について再定義する重要性を主張し、経営者の意思決定において経営理念が重要な役割を占めるべきであると述べている。このことは、環境要因変化に部分適合させようとする経営判断の危険性について警鐘を鳴らすものであり、研究のテーマとして十分価値があると考えられる。

論文構成の妥当性

本論文の構成は以下のとおりである。

第1章 序文

第2章 経営理念研究のための基礎的考察

第3章 経営理念に関する学説概説-経営理念と経営目的の相関を中心として-

第4章 企業環境論の台頭と経営理念論の衰退

第5章 「企業と社会」論の展開と経営理念の再構築

第6章 結語にかえて

引用文献

論文の章立ては歴史的な流れが分かるよう配慮された構成になっている。各章では、経営学史の観点から重要な学説を丁寧に説明しつつ、経営理念に関する内容が明確になるように記述されている。

第1章は本論文の全体的な内容について述べられたもので、経営理念を研究することの意義や問題意識について説明がなされている。第2章は経営理念を検討する上で重要となる基礎的な概念についてドイツ経営経済学およびアメリカ経営学の内容を中心に概説している。「企業」や「経営」の概念がどのように用いられ、どのような学説があるか、「企業」や「経営」の「主体」に関するこれまでの議論が述べられている。本章の最後に経営理念に関してその構成要素や各要素の関連性について詳しく述べられている。

第3章では、経営理念に関する主要な学説について概説している。取り上げられている学説は7つで、いずれの学説についても時代背景、主たる主張、問題点が適切にまとめられている。また、これらの学説を企業主体型、社会関連型の2つに分類することで、各学説の関係性を明らかにしている。

第4章では、企業環境論と企業の社会的責任論について詳説し、経営理念論が衰退した過程とその問題点について述べている。企業環境論が流布してきた時代的背景やそれに関わった学説を述べつつ、その結果、経営者が抱えることになってしまったジレンマや矛盾について論理的に解説されている。本章の最後では、これらの問題を解決するために「共生」という視点が重要であると述べている。

第 5 章では、企業環境論の問題点を超え、経営倫理論や経営共生体理論の観点から経営理念を再構築することの必要性について検討されている。経営者資本主義や協成体・共生体社会への移行という社会構造の変化の中で、企業が継続的に活動をするためには、経営者は企業環境変化への対応だけに終始するのではなく、経営理念に基づく意思決定に立ち返ることが必要になってくると述べられている。このとき、経営理念そのものも変化に対応させつつ修正を加えることが重要であると述べられている。

第 6 章では、全体の総括と経営理念の重要性について再度主張されている。企業が継続的に発展するためには、「見えざる手」ではなく「見える手」として、経営者が拠り所とする経営理念がこれまで以上に必要であると結論づけられている。

序論とまとめにあたる第 1 章と第 6 章を除き、各章の分量は多く、取り上げられている学説も多岐にわたる。ただし、いずれの章も経営理念を中心概念として論理が展開されており、第 5 章で見られる主張を正当づけるものとして必要不可欠なものになっている。したがって、納得性は高く、各章のまとまりもよいものになっている。

口頭試問および公聴会について

口頭試問および公聴会において、蘇氏は問題意識・先行研究の内容や問題点・本論文の主張について適切に説明することができた。特に、経営理念の観点から先行研究を俯瞰的に説明できたように思う。また、概念的な内容に関する質問に対しても真摯に回答することができた。本論文の主張については、やや混乱する場面も見られたが、全体的に満足できるレベルであった。

文献渉猟について

本論文は経営理念について経営学史の観点から検討したものであるため、引用文献数は膨大である。引用文献の中心は 1960 年代から 90 年代であり、2000 年代以降のものは少ない。しかし、歴史的に重要な論文は網羅されており、学位論文として問題ないと思われる。

研究業績について

本論文に係る学術論文は 4 編で、単著が 2 編、共著が 2 編である。査読付きのものは単著・共著それぞれ 1 編の計 2 編である。詳細については、学位申請書類一式中の研究業績書に記載されているのでここでは省略する。

試問結果要旨

博士の学位申請条件を満たしていることを確認し、審査委員 3 名は学位申請論文を慎重に吟味した。その結果、博士(経営学)の学位論文として適と判断する。経営理念という抽象的な概念について、学説史を数多く検討し、今日的な意味を与えようとする努力が論文の随所に見られ、学位を認定するに足る論文であると判断した。以上は審査委員 3 名による慎重な審査の結果である。

博士学位論文 論文内容の要旨及び審査結果の要旨 第6号
発行日 2016（平成28）年4月25日発行
編集兼発行所 追手門学院大学大学院 経営学研究科
